SSKO
東腎協

83年1月25日 **No. 44**

昭和五十一年二月二十五日第三郵便物認可
SSKO通巻第七八八号（毎週二回月・金曜日発行）
昭和五十八年一月十四日発行

東京都腎臓病患者連絡協議会（東腎協）
事務局・〒161東京都[redacted]
電話[redacted]
送金先・郵便振替口座・[redacted]
加入者名・**東　腎　協**

「生と死」の問題

透析者になったときから「生と死」の問題は、たえず即目的に私をとらえてはなさない。透析者になった瞬間から、私の新しき生への転生が開始され、その生の過程では一日一日、一瞬一瞬が、「一期一会」的な意味と重みをもってきたのである。

（前田こう一著「難病の海に虹の橋を」より）

え・大森輝秋

社会保障後退の中で、私達は

ー全腎協幹事会に参加してー

東腎協副会長　一ノ清　清

最近、私達は第二臨調という言葉をよく耳にしますが、この答申が実施されますと、透析治療や生活をおびやかす事にもなりかねないもので、今回の幹事会（十月十六日～十七日）でも重点項目として討議されました。

この答申の中で、最重点課題に挙げられているのが社会保障関係施策の見直しで、特に私達に関係の深いのは医療費や年金を抑制しようとしている点です。

最近、これらの引き締めが強められている県もあり、国民年金の障害年金が一級から二級に下げられたり、不支給の通知があったとか報告されています。

医療費関係でも薬、注射、血液検査の回数、透析液等の削減が実際に行なわれている報告もありました。

更に少ない医療費や入院時の食事代の患者負担、医療費の立て替え払制、地方自治体の福祉の見直し等、私達に直接関係のある事が厚生省や大蔵省で検討されているとの事です。

もし実施される事になれば、これまでの運動によって得た㊙や更生医療により医療費の支払いをせずに治療を受けられた人が、治療費の一部負担や透析治療費の立て替え払いをするようになるかもしれません。これ等どれをとり上げても重要なことと思います。

全腎協は、他団体とも協力してこれ等の反対運動を進めていく予定です。私達も一人ひとりが関心を持ち、勉強してこの改正に反対し、運動をしていく必要があると思いました。

次に七月の長崎水害の実態について代表者から生々しい報告がありました。

この中で痛感した事は、電気、水道、電話は不通となり、道路は寸断され、各患者との連絡は一切できなくなる事、復旧に一～三週間位かかるとの事でした。

この災害の教訓として、自分の体は自分で守らなければならないという事だそうです。

今後、災害対策については、行政に働きかけ、また各患者会は病院と協議して対策をたてる必要があり、個人個人は、透析日が一～二日のびても良いように自己管理をしておく必要があると思いました。

〈おもな記事〉

全腎協幹事会に参加して……(2)
腎臓病医療相談会開く……(3)
会員交流会開く……(4)～(5)
会員交流会に参加して……(6)～(7)
街頭キャンペーンで成果……(7)
街頭キャンペーン感想文……(8)～(12)
東腎協10年誌近く発行へ……(12)
仲間からのたより……(13)～(14)
全腎協機関紙講座に参加……(15)
事務局からのお知らせ……(16)

慢性腎炎の患者も悩んでいます

――腎臓病医療相談会開く――

腎臓病の医療相談会（東難連主催）が、九月二十六日、東京中央区八丁堀の東京都勤労福祉会館で開かれ、二十五人が受診しました。

この医療相談会は、患者の相談したい質問に担当の先生が親切でていねいに答えてくれます。また、患者の受診したい病院に必要があれば紹介状も書いてくれます。

日ごろの患者の悩みをドンと受けとめてくれる、というので受診者から大変好評を得ていますが、今回は、杏林大学医学部教授の長沢俊彦先生をはじめ四人の先生によって行なわれました。

そして、先生との相談が終わった患者さんに対して、東腎協役員との話し合いを可能な限り持ちました。

私が話したひとりの人は、K大学病院に通院しているというAさん（男性）。この人は腎不全で、二週間に一度通院していますが、自分がどういう闘病生活をしていっていいのかわからなく不安なので相談に来ました、と話していました。そして、勤めていた会社もやめてしまったということでした。

この日の相談で、病気について納得をし、また私たちの話し合いを通してこれからの生活に希望も湧いてきたようでした。

普通「あなたは、腎臓病ですよ。余り無理をしないで気をつけて下さい」――こういう風に言われた患者は、どういう闘病生活を送っているでしょうか。効果的な薬もなく、治療が困難な病気なので、患者は非常に悩んでいるのではないか、と私は思います。

特に身近かに、同じ腎臓病患者もいなく、一人で細々と通院、治療している患者にとってなおさらのことです。

今回の医療相談会を通じて、あらためて私が感じたことは、透析予備軍といわれる腎不全初期の患者はやはり相当の悩みを持っていることです。

きちんとした病院で定期的に検査、指導を受けていても、それでは実際の生活の場でどうしたらいいのかわからない――というのが実情ではないかと思いました。

また、そのことは非透析患者の組織化を何らかの形で進めていく必要があることを認識させられました。

（加藤記）

日ごろの悩みや疑問話し合う
会員交流会開く

東腎協は、十一月七日（日）、午後一時半～四時半まで、東京都勤労福祉会館で会員同士の親睦を深めるため、交流会を開きました。今回の交流会は、去年までの個人会員交流会を各患者会会員も参加できる形に変えました。参加者は、会員が十九人（その中で個人会員七人）、役員が九人の計二十八人でした。あいにくの雨天のため、参加者は計画していた人数より少なめでしたが、それだけじっくりと、日ごろの会員の悩みや、疑問点を話し合うことができました。

交流会は、泉山副会長を司会にして、平沢副会長のあいさつの後、各会員の自己紹介から始めました。

参加者は、一人が慢性腎炎、一人が糖尿病と腎臓病で腹膜かん流を行ない入院中の患者さんに代っての家族の方、その他は全員が透析患者でした。

議題をみんなで出す

まず交流会の議題として、参加者が現在困っていること、知りたいことを出してもらいました。

①「病院腎友会の活動で、参加する人が少なく、参加する人も、きまった人に限られてしまう。他の会ではどんな活動をしているか知りたい」

②「今後医療費抑制のため、医療費の再切り下げや、透析時間の短縮があると聞くが本当か」

③「CAPDとはどんな治療法か」

④「現在、自分は血液ろ過法の透析をしているが、保険で認められていないため、一部機械の自己負担がある。そのほか、特別の治療に対しても、昨年の医療費切り下げ以後、細かなことで自己負担がでてきた。今後が不安である」

⑤「移植は、腎臓提供者がなかなか見つからないため、三十歳以下の人にしかチャンスが来ないのではないか、不安である」などの意見が述べられました。

これらの問題に対して、各患者会の実情が報告されました。

会活動、医療費問題

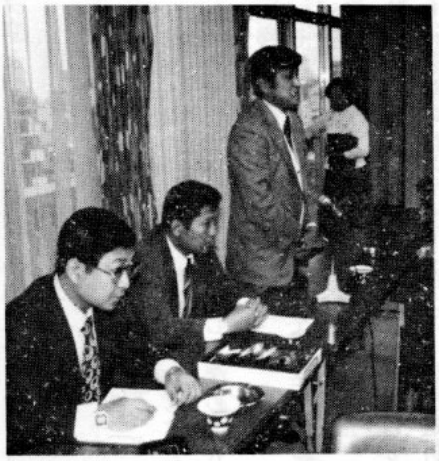
会活動については、病院側が協力的な三～四ヵ所の患者会では、ボウリング大会、旅行等のレクリエーションや栄養指導等の学習会も行なわれ、活発に活動しているようでした。その他の会は、費用

の点や夜間透析者の不参加などで活動は厳しいようでした。

つぎに、医療費問題について、泉山副会長から現状の説明がありました。

透析時間短縮という話は聞いていないが、国の医療費補助抑制のため、大蔵省が現金償還制（患者の一時現金立て替え払い）を検討し、厚生省も、薬価基準の切り下げをはじめ、食費の入院患者負担までも検討していること。ほかにレセプトの審査が、かなり厳しくなっていることが述べられました。

CAPD療法や血液ろ過法についても話し合いました。これらは保険適用になっていないため、東腎協の運動として、適用を訴えることができないか、などの意見も出ました。



東腎協の活動の説明を行う

死体腎移植について

移植については、嬉泉病院の時田さんから、生々しい体験談がありました。

時田さんは、透析八年目の一昨年八月、死体腎移植をしました。これは腎移植を申し込んでから、五年目にやっとめぐってきたチャンスでした。

手術時間は四時間半でうまくいきました。しかし、すぐには尿が出なくて、一カ月目にやっと出始めました。出始めると、一日最高六千ccまで出ましたが、これが大変で、尿を出すため、食事のほかに四千ccほど水を飲まなければなりませんでした。しかもボウコウが小さくなっているため、一回に百cc位しか排尿せず、一日に七十一回もトイレに行ったことがありました。この時は夜も寝ている暇がなかったそうです。

その後、四回の拒否反応を起こしましたが、薬と血漿交換で乗り越えました。

しかし、手術して三カ月目に起こった五回目の拒否反応は強いもので、発熱、クリアチニンの上昇、尿量の減少で、ついに入れた腎を取り出すことになりました。すぐに透析にもどりましたが、尿が出たことでシャントがつぶれてしまい、股動脈を使って針刺しをする、大変な透析から始めなければならなくなりました。

一時は失敗したことに、かなりショックを受けたようでしたが、今は元気になり、またチャンスがあれば考えてみると、話されました。

東腎協への要望

その他、東腎協への注文として、

「この交流会に、医学的説明ができるように、医師をよんでほしい」

「若い人の就職問題、結婚問題などの解決のため、青年部を作ってほしい」

などがあり、話し合いました。

最後に、高橋副会長の、「今後も会員一同協力して問題解決のため努力しましょう」とのあいさつで交流会を終えました。

（報告者・高橋）

●会員交流会に参加して

少ない参加者にガッカリ

大和病院透析友の会　和田　雄二

参加人員の少ないのにがっかりしました。患者同士がもう少し関心を深めてもらいたいものです。

それでも出席者から真剣な意見や体験が述べられ、大いに参考になりました。

透析歴十年以上の者、まだ始めたばかりの者等の悩み、苦しみ、あるいは透析も落ちついて仕事に、趣味に楽しんでいる者、すべての談話を身にしみて受取ることが出来ました。また、死体腎移植経験者の体験談も尊く拝聴いたしました。

会費の使い方にも日頃多少の疑問がありましたが、適切な指針を教えていただき、すっきりしました。

多勢集まればいろいろの意見が聞かれます。将来は、患者会の人数に応じ出席人員を指定したらいかがでしょうか。以上、感じたことを断片的ですが申し述べました。

なお、会場は隣室の集会のマイクが邪魔になり、談話が聞き取れなく残念でした。

熱意あふれる意見に感動

西池袋黎明会　柳沢　節子

本当に有意義な交流会でした。私はこれで二回目でしたが、皆さんの熱意あふれる意見に、私もしっかり考えていかなければいけないと思いました。

今後は、ますますきびしくなる情勢に一人ひとりが自分のおかれた立場で精いっぱい努力していく必要があると思います。

私どもの病院も一人の考えが今一歩及ばない例もあり、もどかしく思うこともあります。これから私一人からでもしっかり啓蒙していかなければと考えております。今後ともよろしくお願い致します。事務局の皆々様のご努力に厚くお礼申します。

私達の会の運営に役立つ

西池袋黎明会　野中　潔

私は、昨年東腎協に入会させて頂きましたが、このような会合へは今回初めて出席致しました。

患者会の代表の方、会員の方のお話をうかがい、それぞれに様々の問題をかかえながらも積極的に生きていこうという姿勢を見て、大変心強く感じました。

私達の患者会は、これまでほとんど活動らしい活動もせず、私達を取り巻く社会情勢にも疎くなりがちでした。しかし、今回出席された皆様は、そのような事柄についても強い問題意識を持っており、進んで考え、行動していこうとされてい

＜15ページの解答＞

「架空のできごとから難行苦業の末、見事に会心の作をつくった彼だが、生一本な性格なので、みんなの機嫌をそこねはしないかとはらはらした。」

仮空→架空　難業苦業→難行苦業
末→末　美事→見事　快心→会心
気一本→生一本　気嫌→機嫌　わ→は

ることを知り、私達の会もそのような方向へ向って歩み出すようにしなければいけないと強く感じながら帰ってまいりました。

そこで先日、交流会の内容の報告を兼ねて、今後の会の運営についての提案をパンフレットの形にまとめて会員に配布致しました。

その中では、交流会当日、事務局の方から説明を受けた医療制度の変更問題についても述べ、私達一人ひとりがもっと広く社会の動きに目を向けていくべきではないかという呼びかけを致しました。

これから、私達の会がどのように活性化していくかわかりませんが、できるだけ多くの人がそのような事柄を自分自身の問題としてとらえ、自分の意見を持ち、議論に参加できるようになってもらいたいと考えております。

また、他の会員にもできるだけ東腎協の会合等に出席してもらい、見聞を広めるようにしていきたいと考えております。

今回、交流会に出席させていただき、大変良い刺激を受けました。ありがとうございました。

街頭キャンペーンで大きな成果

――常任幹事会でまとめ行なう――

昨年の九月十九日に行なわれた第二回目の「腎バンク拡大全国一斉街頭キャンペーン」は、全国で四、六四〇人が参加して大きな成功をしました。東腎協では、十月二十四日の常任幹事会でキャンペーンのまとめをしたので報告します。

◇実施月日　九月十九日　十三～十五時
◇実施個所　五カ所
◇参加者　百六十九人
◇チラシ配布　二万枚
◇用意したもの　ゼッケン、メガホン、横断幕

◇全体を通しての総括

①年輩者の参加が多く、若い人が少なかった。

②雨で参加者が少ないと思って、家族を一緒に連れてきた会員もいたので、参加者が予定した人数より多くなった。

③メガホンでしゃべる時、なにか訴える統一的な文章が欲しい。

◇渋谷：チラシの枚数五千枚は限界。午後一時半から三時半までかかり配布。体力的にも限界。

◇上野：十五分早く始め、三十分早く終了。右翼が隣で演説していたのでやりにくかった。駅の構内などにチラシがかなり捨ててあった。

◇銀座：参加者は年をとった人が多かった。「若い人が少ないがどうしたのか」という声が聞かれた。

◇新宿：メガホンでしゃべるのは役員のみ。配布するのに三時近くまでかかってしまった。

◇立川：予想以上に参加者があり、ゼッケンも足らなくなった。二時半頃にはまき終ってしまった。読売新聞多摩版に掲載された。

統一キャンペーン後、腎友会でドナーカードをとり寄せ登録してもらったり、新聞折り込み、タクシーの中に置いて登録を呼びかけた会員もいました。

●街頭キャンペーン感想文

2時間立っ放しは無理

代々木病院腎友会　俣野　夏男

①　透析患者に二時間立ちっ放しはちょっと無理。二時間やるなら一時集合組と二時集合組に分けるか、近くに休憩所をこしらえて三十分交替で休むとか考えてほしい。

②　時期は今回は暑からず寒からず結構でした。お天気のことまでは事務局ではどうにもならないよね。

③　登録カードを何故持って来なかったのですか？

――新宿駅頭で――

④　チラシに漫画を使ったのは大変よかったと思います。表紙がちょっと地味でしたね。

こういうものも、専門家に協力をお願いしたらどうでしょう。もちろん金を使わずに、ボランティアとして協力してもらうのです。これはチラシのデザインや今回のキャンペーンだけでなく、日常の活動でもっと考えていっていいのではないでしょうか？

たとえば水上勉氏は身障者のお子さんを持ってらっしゃるので、こういう問題には理解があると思います。原稿依頼するとか：、黒柳徹子氏や永六輔氏なんかも聾唖者の問題にとり組んでますわ。いろんな人の力を借りて運動を拡げて行きましょう。

まだまだ工夫の余地がいろいろあると思います。事後の感想だけでなく、事前に患者会等の意見や知恵を吸い上げる努力が必要だと思います。

⑤　患者の家族に参加してもらうのも良いことだと思います。こういう運動を通じて患者のおかれている社会的情況の別の側面を認識することにもなるでしょうし、また患者の家族同士の交流も生まれれば好ましいことだと思います。

来年は小生の高校生の娘を連れて行こうと思います。良い社会勉強になるでしょう。

重い腰をあげて参加

個人会員　篠原　孝昭

前回の全国統一街頭キャンペーンにも職場の先輩にさそわれましたが、用事があり参加できなく、今年も九月十九日にあるからできたら参加するようにとさそわれました。せっかくの日曜日であるため、気が進まないでいました。でも、自分が会員に加入している以上、会員としての義務ははたさないといけないと思い、重い腰をあげて参加した次第です。

さて、いよいよ用意されたパンフレットを手にして人通りの多い方へいき、一人ひとりに手渡ししなければいけないが、

なんといって手渡せばいいか考えてしまいました。

最初は「腎バンクに御協力下さい」といって手渡していたが、通り過ぎる人みんな敬遠してしまうので、途中から「読んで下さい」「読んで下さい」と同じことばで手渡していきました。

信号が青になるたびに人がおおぜい通過するのに手渡せるのが五～六枚くらいで、みんな誰かが受けとっている間に急ぎ足で通過してしまい、なかなか手持ちのパンフレットが減らなく、その時間いろいろと目をそむけていく人達のことを考えていました。

とにかく、自分の身近な人は良く理解してくれているが、通りすがりの人達は「腎バンク」とか「人工腎臓」とか初めて耳にするのがほとんどだろうから、心棒強く呼びかけるより仕方がない。受けとってくれない人が多くても、用意したパンフをみんな配れたら、その分だけの人が読んで理解してくれるかは別として、自分達の呼びかけに応じてくれたことになるからそれでいいと自分にいい聞かせて、自分なりに頑張りました。

男女問わず、若い人の多くが自分には関係ないという顔をして通り過ぎてしまうので残念でなりませんでした。また、どのようにして参加者に呼びかけられたか知らないが、街頭キャンペーンがあることを多くの会員に参加を呼びかけてほしいと思います。

最初はとまどったが

康腎会　嶋田　孝司

九月十九日（日）雨、午後一時、立川高島屋前の街頭において透析患者三十数名で、通行人にパンフレット約五千枚を配布しました。

私にとって街頭でキャンペーンするのは初体験であります。胸に「腎臓バンク」と書かれたゼッケンを付けて通行人にパンフレットを配布すること位簡単に考えていました。いざ街頭に立って見知らぬ人に配布するタイミングがむずかしく、最初はとまどい、ばつが悪く奥に引っ込んでしまいました。しかし、自分自身のことでもあり、気を取りもどし市民の一人でも多くの方が腎臓移植に対して理解をしてくださるよう、心をこめて雨の中を積極的に配布しました。

立川駅周辺は、誰もが片手にパンフレットを持った市民の姿で埋めつくされました。このキャンペーンを通して、これまで先輩達が市民に訴え築きあげた実績がやっと芽を出し始めた時期だと思います。

これから先は、大切な芽を大地に強い根を張らせて大きく成長させることが透析患者一人ひとりの務めと思います。

しかし、今回のキャンペーンの参加者はほんの一部で、まだまだ他人まかせの患者が多いのには残念です。透析療法も改善されて良くなってきましたが、まだ改善点が多く残されています。そのためにも積極的に多くの力を合わせて、よりよい生活を求め、今後も機会あるごとに参加したいと思います。

無関心の人に苦労

大山中央腎友会　山田　洋司

キャンペーンに参加して感じたことは、一般の人達が無関心でチラシを出してもなかなか受けとらない人が多く、手渡すのに苦労した。なにかもっとアピールす

●街頭キャンペーン感想文

る方法がなかっただろうかと思う。

今度キャンペーンをする時には、登録用紙も一緒に渡して欲しいという人が多かった。

年に一度といわず、時々この運動をやってほしい。府中、鮫洲などの運転試験場などにもこのチラシを出して欲しいと思います。

（山田さんは、キャンペーンのチラシの原稿も考えてみたと次のような文章も送ってくれました。

―― 立川駅頭で ――

私達の仲間は、毎日おしっこと闘っています。

皆さん、人間は一日どの位のおしっこが出ると思いますか。平均二千～三千ccのおしっこが出ます。私達腎臓病患者は一日百五十～二〇〇cc位のおしっこしか出ません。

では、残ったおしっこは、どうなるのでしょうか。これは医学的になりますが、人工透析という機械の力を借りなければなりません。

これで解決したでしょうか。一週間に二～三回、時間にして約十五時間機械と闘い処理しています。これでは、いつ大きな天災がくるかわからない今日このごろ不安でたまりません。

欧米ではどうでしょうか。一年間に五千人もの人が腎臓移植をして助かっています。これはどのような仕組になっているのでしょうか。まず、国民の一人ひとりが「交通事故」「病死」「事故死」などした場合、いつでも「眼球」「心臓」「腎臓」など提供出来るようになっているのです。

日本でも昭和五十五年（一九八〇年）法律が改正されて死体腎移植が本格的に出来るような体制が生まれました。しかし、現在までにおこなわれた登録制度による死体腎移植は、全国でも数件しか数えられていません。

日本でも全国で約四千人もの患者がいます。出来るだけ多くの人が腎登録し、多くの腎不全に悩む患者を安心させて下さい。お願い致します。

参加してよかった

北多摩病院腎友会　吉川　和子

病気の仲間が一堂に集まって〝キャンペーン〟することがとても有意義であった。参加してよかったと思った。

街頭の反応は全く手ごたえがなく、こんなことで良いのかなと恐ろしい気がした。

小学校とかの教育の現場で腎臓病の原因、治療法とかを徹底的に教えて、慢性

に移行する手前で一人でも多く完治するように指導して欲しい。

とにかく、どんな所でもどんな時でも、腎臓病になってしまった我々が恐ろしさを知らない人にアピールすることによって知識のない人にも少しでもわかってもらい、十分に気をつけてもらい、これ以上透析になる患者を増やさない努力は続けなければならない。

生まれて初めて街頭に立って

北多摩病院腎友会　林田　洋子

私は立川に参加しました。三十人が集まりました。

生まれて初めて街頭に立ったのですが、案外平気で配ることが出来ました。――もっと声が出ないかと思っていたのですが。しかし、あいにくの雨空で道行く人は片手に傘、片手に荷物を持って気ぜわしく歩いているせいか、なかなかチラシを受け取ってくれませんでしたが、雨にぬれながらも人波に入り「こんにちは」「ぜひ読んで下さい」「お願いします」等、いろいろ声をかけて配りました。

そして感じたことは、三十代～四・五十代の男性の無関心さが一番目につきました（私には）。一番働きざかりで健康にも仕事にも自信のもてる世代です。しかし、何におわれているのか一瞬も止まることが出来ないとばかりにゆとりのない様子の人が多いということは、なんだか薄ら寒い無気味な感じを受けました。社会をリードしていく人達なわけです。そして、成人病にもなりやすい世代なのです。もっと広い気持ちをもって理解してほしいと思いました。

しかし、寒い雨の中にも暖かな声援をさりげなく送ってくれる人もいました。チラシを渡しながら「読んで下さいね」と言ったら立ち止まって、にっこりと笑いながら「ハイ」と言い、「学校のお友達にも読んでもらってくれる？」と言ったら「ハイ、わかりました」ととても感じよく十枚ほどのチラシを持っていってくれました。そんな女子高校生が二組いました。

私もいままで何回、いや何十回とチラシを受けとる側に立ったことでしょう。しかし、今回自分で配って、そしてほんとうに読んでほしいと思って、これからはもらったチラシをきちんと読もうと思いました。ほんとうに良い経験をしました。

もっと積極的にならねば

北多摩病院腎友会　斉藤　保雄

今回初めて参加しましたが、街頭キャンペーンは年一回だけと聞きまして、物足りなさを感じました。パンフレットを配る時間は、二時間程度で十分だと思いますが、午前と午後にわけて配ってみたらもっと効果的のように思いました。

それからパンフレットの内容ですが、腎バンクの申し込みの仕方やその場でも受付ができる体制があった方がよいと思います。また、本当ならパンフレットが申し込み用紙になるようならもっといいでしょう。

また、キャンペーンに参加した人達への交通費や昼食代など誰が負担するのか、もっと明確にすべきだと思います。こういう企画をされて先頭に立っている方々は、大変な努力をされているだろうと思います。自分達は、参加を呼びかけられ

●街頭キャンペーン感想文

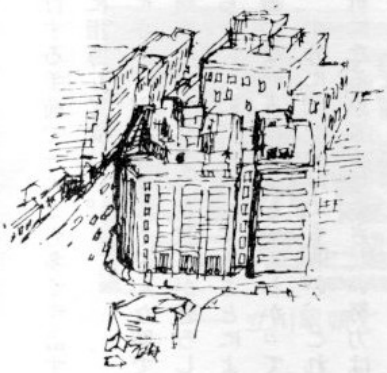
て参加するだけの安易な立場のように考えていますが、もっと積極的にならねばと、役員の方々には頭が下がる思いです。

勇気を出して一枚一枚渡す

北多摩病院腎友会　鳩沢セツ子

午前中の用事を済ませたあと、立川の駅前へと向かいました。みなさんより三十分遅れてキャンペーンビラ配りに参加しました。この日は、あいにく小雨の肌寒い日で、道行く人も足早に心もち身をちぢめて歩いていきます。

みんな傘を持ち、手がふさがっていたので、ビラを渡すのに少し気がひけました。それでも勇気を出して「どうぞ。どうぞ、およみください」と一枚一枚渡しました。



ビラを配っている私を逃げるようにさけていく人もいます。特に若い二十代の人とアベックに多く見られました。しかし、中年女性は無表情でも静かに受取ってくれます。また、子供たちはまるでアメでももらうかのようにとても喜んでもらっていきます。そんなかわいい子供にあうと、沈みがちな気持ちもまた元気になってきます。

人によってそれぞれ反応は違いましたが、全体的にみんな無表情でぶっきらぼうでした。特に、配ったビラが目の前で捨てられ、踏まれてどろまみれになっているのを見ると悲しくなります。

しかし、先輩の代からのこのような地道な活動があったからこそ、今の恵まれた透析治療があるのだと思います。これからもキャンペーンはもちろん、どんな小さなことでもできる範囲で参加し、協力していきたいと思います。

東腎協10年誌近く発行へ

ー会員には無料で配布ー

昨年の五月から、十年誌の発行のための編集委員会を作って準備を進めてきましたが、昨年末にやっとまとまり、今、印刷をしているところです。

その主な内容を紹介すると、①題名は「あゆみ」（東腎協十周年記念誌の副題が入る）②東腎協十年の活動（歩み）を振りかえって　③女性にとって透析の意味するもの（座談会）④会員の手記　⑤東腎協の活動年表　⑥一九八一年十月に行なった会員の実態調査報告、等です。

A5判で百ページの予定。会員には無料で配布されますが、会員外は五百円で頒布しますので、希望があれば事務局へ申し込んで下さい。

十年誌「あゆみ」の編集委員は、泉山、一ノ清、高橋、加藤、森、木村、柳の七人でしたが、巻末の編集後記に一人ひとりの苦労も書かれています。

また、この十年誌がお手元に届きましたら、きたんのない感想を沢山の人がお寄せ下さるようお願いします。

仲間からのたより

短いように思える透析10年の歳月

代々木病院腎友会
栗原　勇

この十月で、透析歴十年になる。過ぎてみると短いようにも思えるが、三歳だった頃の娘が高校生になり、一歳の娘も中学生、背丈も体重も追い越されてしまった。

この成長ぶりが、長い歳月であった感慨も起こさせる。しかし、悲愴がったり、やせ我慢したらということはできるだけしないようにしている。よく「経験したものでなければわからない」というが、その言葉の中には自分だけが苦しんでいるという裏返した思いあがりがあるようだ。

ゴーリキイの「どん底」の中に、「一生をぶるぶる震えてびくびくし通して、ぼうを下げてみじめに暮した」。働きもないくせに、乱暴な錠前屋のおかみさんが、息を引きとるまぎわ、巡礼ルカから「死ねば静かで安らかで安らかな天国に行ける、の希望をもちなさい」と慰められて「ほんとうにそうならいいねえ！でもあの世に苦しみがないのなら、もう少し辛抱してもいいよ！　生きていたいもの」という台詞がある。

この素朴なひとことこそ、私の生きている原点を示す言葉に思える。

健康な人よりは、ハンディをおっているが、透析がなければ十年前にこの世から消えていた。今でも透析をやめれば旬日を経ず確実に生命が絶えることは、すべての透析患者の、共通した境遇である。

私たちは、治療費だけで生まれたばかりの赤ん坊から寝たきりの老人まで含めて、すべての国民一人あたり年間約三千円の負担をかけて生きている。

私一人でも十年ならば七千万円。なみのサラリーマンが飲まず、食わず、住まわずで一生かかって稼ぎ出すに近い治療費を費してきた。

現在の制度ができるまでに、大勢の同病の人々が死を賭して運動をした。科学・医学も進歩した。

「喉もとすぎれば熱さも忘れる」の類で、ともすると今があたりまえの気分になりやすいが、折にふれて世間に大きな負担をかけているのだということを出い出し、自戒としていきたい。

同時に、私たちの生命と暮しを守るために、ひとりよがりにならず、微力でも力を出し続ける義務をもっていると思う。

（代々木病院腎友会「トマトクリット」№40から）

東腎協に入会して共に生きる決意が

個人会員
桃木　幸男

皆様、この度十一月に新しく会員になりました。いろいろと知りたい事や勉強したい事や、そして皆様と共に力を合わせて頑張っていきたいと思ってます。

わたくし昭和一ケタ生まれの五十三歳ですが、腎臓病になり、そして透析を始めて早や三年近くになります。わたくしの人生にとって、これほどに重大な試練を受けた事は、大きなショックでした。

それまでは健康は人並にすぐれており、

仕事も体力を資本にした土木会社に二十数年働いてました。いろいろと苦労もありました。雨の日も風の日も、それこそ文字通り身を粉にして、ただひたすらに子供達の為に汗を流して頑張ってきました。そして、やっと子供達が自立してホッとした時に、この病気になり、自分の人生に灰色の暗雲が見えました。

最初はこんな病気はすぐ治るんだ、自分はもともと体が丈夫なんだから、病気になる前に土木仕事で疲れた時には酒を飲み、そして血圧が普通の人より高いけど（当時上が二二〇、下が一二〇）入院してもすぐ治るんだと、軽い気持でいました。

しかし、透析を重ねてやる内に、だんだんとこの病気の重大な事に気づき、あわてました。病院で入院してる仲間の話などを聞き、おそまきながらいろいろと医学書や図書館などに行って、腎臓病に関する本を勉強して自分自身の不安を消そうと努力をしましたが、わたくしの人生のともしびは永久に明るくなりませんでした。

毎日毎日が不安と緊張の日々でした。そして、この胸の苦しみを誰に打ち明けよう、妻に子供に、いやそんな事は出来ない。今までにも苦労をかけ、そしてまた病気の為にせっかく築いた家庭の平和をわたくしの事でつぶしたくはない、わたくしは生まれつき孤独な人間であり、親しい友人もおらず、ただただ働らくだけが心のなぐさめと安らぎでした。

しかし、このたび貴会の事を偶然に知り、そして都内にいる仲間、全国で透析を受けてる皆様の一人ひとりが手を取りあって、明日をめざして頑張ってるたくましい明るい仲間がいる事がわかりました。

皆様方の手紙やいろいろな事を知り、わたくしも今までの弱い気持を捨て、皆様と共に生きていく事を考えました。何分にも初めての入会なのでわからない事がいろいろとあります。これからも皆様と共に頑張っていきたいと思ってます。

どんどん手紙も書き、交流を深めて、皆様と共に一日一日を悔いのない充実した人生を送っていきましょう。

（十一月二十四日）

通信制高校の文化祭で腎キャンペーン

個人会員　佐藤　亮子

十一月の十四日、二十八日の二日間、私の通っている都立上野高校通信制課程では、文化祭が行われました。

その中の行事の一つとして、腎臓病キャンペーンが行われ、その時集まった署名と募金（別便）を送らせていただきます。

学校内では、八十名以上の方々が署名を下さり、（その他は私の通っている病院内の方々から）また、死体腎移植の申し込み用紙は、八名の方がお持ち帰りになりました。

多くの方々の善意のおかげで、私にこれだけのことが出来、大変幸せに思いました。また、このキャンペーンで様々なことも勉強させていただきました。

どうもありがとうございました。事務局の皆様も御苦労の連続と存じますが、どうぞ頑張って下さいませ。これからもよろしくお願いいたします。

機関紙づくりはやはり難しい

ー全腎協機関紙講座に参加してー

木村妙子

五反田「全社連会館」の一室は少々顔色は悪いが熱心な学習者で一杯であった。十月三十日（土）、三十一日（日）の両日、宿泊をしての交流会を含める、全腎協主催の編集講習会が開催されているのだ。入口近くのテーブルの一つには氷と熱いお茶が心やさしくも用意されていた。

東腎協からは編集担当の加藤氏と全腎協運営委員の石川氏、そして編集見習中の木村が参加した。

三十日の講演は日本機関紙印刷所・編集相談課長・姫路久氏であった。オーソドックスな編集技術を丁寧に教えて下さる。しかし穏やかな中にもワサビの利いた点があり、参加者全員に抜き打ちテストを行なった。誤字を訂正させる問題であったが、八個も誤字があったのに、辞書がないため直せず、正解者はたった一人。透析患者組織での編集者のレベルが判明し苦笑する場面であった。

そんな中で、東腎協機関誌は見出しのつけ方など、唯一ほめられ、加藤氏の面目躍如といったところであった。

編集の初歩的な学習をしたわけであるが、大変そうだという感想につきる。まあ、あせらずに学習する以外になさそうである。

別室での夕食の後、交流会に移った。これに一番期待して参加したのだが、時間がないためもあり、各県の意見を一わたり聞いて、終会ということで、深い話し合いはできなかった。

しかし、いつもながら、各県の熱意には感心する。県によっては費用も一部負担して、上京している役員の人々には頭が下がる。結局、点としての一人の人間がいかにがんばれるかによって、運動全体が影響を受けるのだという感を深くした。同室の秋田から参加した山口則子さんに愛知の会長を紹介していただいたり、小林事務局長のお部屋におじゃましたり、交流会での物足りなさを補おうとした。

同室の女二人、ねそべりながら、グチを聞いてもらったり、共感したり、運動を続けている中での女性とゆっくりお話しできたのは初めてであり、これが収穫であったともいえる。

三十一日の講師はサンケイ新聞社社会部次長・高山正之氏であった。私は事情があり参加できなかったが、現場に両脚した、興味あるお話しであったということである。

以上で講演会参加の報告は終るが最後に抜き打ちテストの全文を掲げておく。

× ×

次の文章の中で、文字に誤りがあったら、正しい文字に直して下さい。

「仮空のできごとから難業苦業の末、見事に快心の作をつくった彼だが、気一本な性格なので、みんなの気嫌をそこねわしないかとはらはらした。」

（答を知りたい方は六ページを）

事務局からのお知らせ

常任幹事会報告

◎第46回（10月24日、全腎協事務所、出席15人）

一、街頭キャンペーンの総括ー7頁。

二、会員交流会の任務分担について。

三、会費納入方法について。二〜三の患者会から「途中入会者の会費を月額計算にしてもらえないか」との問い合せがあり、討議の結果、10月以降の途中入会者の会費については、一、二〇〇円とすることを決めた。

四、全患連大会（11月3日）の参加。

五、心身障害者医療費について。最近、患者に一部負担を強いる老人保健法の制定など福祉後退の動きがあるが、心身障害者医療費についても一部負担の導入などの情報もあるので事務局で対処することになった。

◎第47回（12月19日、全腎協事務所、出席16人）

一、昭和58年度役員人事について。

二、事務局半専従体制について。事務局体制を確立する。そのために役員会の団結を強めるよう努力する。

三、総会の講演内容について。現在の案としては「CAPD」をとりあげてみたらどうかということで講師を依頼することになった。

四、規約改正案。第8条（幹事会）、第12条（役員）、第13条（事務員）、第15条（会費）を提案することになった。

五、その他

よろしくお願いします

（9月〜11月）

＜個人会員＞

金川テイ、富谷文、吉田小夜子、田守ひろ、森井久夫、柴田すみ子、石野久栄、石橋智博、喜多直子、桜井久男、茂木信一、花岡正隆、塩谷武、富田俊子、清水順三、小泉宣夫、留目伶子、滝沢健浩、高崎宗一、市川栄治、中山正義、桃木幸男、藤岡宏子、鈴木由子、中村日出子

＜患者会＞

中板橋南腎友会（会員数3人）

〒173 板橋区弥生町33の3 西野ビル

中板橋南診療所

常任幹事の久保田一恵さん結婚式をあげる

東腎協常任幹事の久保田一恵さん（三軒茶屋病院腎友会）は、病院職員の秋田ひとみさんと11月3日に結婚式をあげました。結婚式には、腎友会会員も出席して祝福しました。東腎協からは、祝電、祝金を送りました。

全腎協国会請願が2月2日行なわれます

全腎協の国会請願は、2月2日（水）に行なわれますので、ぜひ多くの人が参加して下さい。

また、請願用紙が手もとに残っていれば至急事務局へ送って下さい。

＜編集後記＞

10月30〜31日に全腎協主催の機関紙講座に参加しました。機関紙づくりは、幅広い知識と編集に対する情熱と能力、そしてたゆまぬ努力が一番要求されるのではないか、と感じました。今後は、この講座で学んだものが少しでも反映できるよう努力したいと思います。（加藤）

昭和五十一年二月二十五日第三郵便物認可
SSKO通巻第七八八号
昭和五十八年一月十四日発行

発行所 身体障害者団体定期刊行物協会
東京都世田谷区砧八ー二一ー三 頒価百円